

松山幸生先生講述

全33回--9

2022年4月

写者

小原靖夫

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

第9回 人間の弱さを担われた大祭司

4章⑭節から5章⑩節 偉大な大祭司イエス

4章⑭さて、私たちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、私たちの公に言い表している信仰を、しっかり保とうではありませんか。

⑮この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。

⑯だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。

5章①大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。

②大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。

③また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。

④また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。

⑤同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子
わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをお与えになったのです。

⑥また、神は他の箇所でも「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と言われています。

⑦キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。

- ⑧キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。
- ⑨そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり
- ⑩神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

(第4章⑭から5章10節) 大祭司キリスト論・序論

この第4章⑭節からのところは、丁度ここから10章の⑳節までにわたって、その中心的テーマが「大祭司キリスト論」ということになっています。

この大祭司キリストということについては、丁度今日の部分、4章⑭節から5章⑩節までがその「序論」をなしていると考えてよいと思います。

従ってここで述べられている事柄はこれから後、さまざまな形で、より綿密に展開されていくわけです。その意味で私たちは先ず、大づかみに「大祭司キリスト論」の中で、ヘブライ人への手紙の著者は何を訴えようとしているのかに心を向けてみるのが、この箇所を学んで行くに当たり大事なことだと思えます。

4章⑭節のところに、

「さて、私たちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、私たちの公に言い表している信仰を、しっかり保とうではありませんか。」

という書き出しで言われていますように、この箇所に言い表されている「信仰の堅持」あるいは「信仰告白のための闘いの姿勢」というものを、この御言葉の中から読み取ることができるのではないかと思います。

前にもふれましたが、このヘブライ人への手紙が記されました頃、丁度ローマ皇帝ネロの大迫害が終わって、次の新たな迫害が近づきつつある、そういう一つの緊張状態の中で「信仰をどう守っていくべきなのか、あるいは自分たちの信仰告白をどう具体的に生かしてゆくべきなのか」という問題が教会の中に起こっていました。そのようなことに対して、この手紙が書かれたのであろうと考えられるわけです。従って、信仰が衰えて、教会生活に倦み疲れた人たちが、近づいている迫害におびえる、そんな状態が、ある場面では目についたのかもしれない。²⁷⁰

先ず、そういう人々に元気を与え、勇気づけていく、あるいは、信仰の持続性を習得させていこうとする、最後まで闘い抜いていく忍耐力を持つように勧めていると言えるのではないのでしょうか。そういう励ましを与える意味で、4章⑬節までの「キリスト論」では、「原理」とか、あるいは「基礎づけ」というような事柄を述べて来たと思うのです。

この箇所では、更にそこから一歩進んで、「神の子イエス」という存在から「大祭司キリ

スト」という告白に向けて進むわけですが、この「大祭司」という言葉の中で、ヘブライ人への手紙の著者は「特に大祭司という仕事、職責を大事なものとして捉え、少なくとも二つのことを、ユダヤ人の中のイエスを信じる人々に対して訴えていこうとしている」と考えてよいと思います。

「大祭司の仕事」は、ご承知のように、先ず聖所に入って、「神に近づくこと」が第一の大事なポイントで、次には「神の声を聴き、それに従って自らが行動すること」であると思うのです。

丁度、新約の時代に入りました時に、イエスの御降誕に対する新約聖書の記述の中で、祭司ザカリヤの組が当番になって、くじを引いたところ、彼が主の聖所に入って香をたく役割を与えられて、「神に近づき、神の声を聴いた」という場面が出てきます。

一般の民に向かってのお告げであるならば、彼は素直に受け止めて従順に従ったでしょうけれども、それがどうも一般の人に対してではなく、「あなたの奥さんが身ごもって子どもを産むであろう」という個人的なお告げであった。そうすると、彼は大変あわてふためき、そんな馬鹿なことがと、神に近づきながら、その声に従順に従い切れなかった。そのために、彼はものが言えなくなったということが生じるのです。

「たとえ、自分にとってそれが全く信じられないような事柄であろうとも、不可能であると思われる事柄であろうとも、『神がお告げになったことは必ずその通りになるのだ』と信じて伝える責任が、ことに大祭司にはあるのです」。その箇所が、ここでも大事なポイントとして掲げられているのです。

⑭節の後半で、

「私たちの公に言い表している信仰を、しっかりと保とうではありませんか」

と言っている以上、ここでは当然、この頃の教会が、信仰告白として、「イエス・キリストに対する告白」を、何箇条か持っていたのだらうと思います。それに対して、「それをしっかり持ち続けよう」、「あなたがたの信仰をしっかりと堅持してください」という、一つの実践的な勧告という形で与えられているのが、この⑭節以下の部分であらうと思うのです。²⁷²

第⑭節から⑯節、

「さて、私たちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、私たちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」

ここは、「大祭司イエス」というお方についての導入部分であると思います。先程の序論的な中でも特に導入をなす部分であると考えられます。

「偉大なる大祭司」という言葉が⑭節に出て来ますが、それは「偉大な」という言葉によって「旧約聖書の中に記されている大祭司」とは区別された遥かに優れたお方であるということ、を、「イエス大祭司論」の中で彼は訴えようとしているのです。どういう意味で偉大なるかは、その後で少しく説明しています。

たとえば、

「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たち同様に試練に遭われたのです」

と説明をしています。イエスは全く罪をお持ちにならなかった、全く清い聖なるお方であられたという、無罪性、聖性をはっきり前提として掲げ、そのイエスが、人間と全く同じになれるために、肉の形をとって、私たちの中にお出でくださったということ、を「私たちの弱さに同情できない方ではなく」という形で記しているのです。

「私たちの弱さをお知りにならない限り、私たちの弱さを担うことはできない。」だから、イエスは、私たちが持っている弱さそのものを、充分にご自分の地上生涯の中で経験なさりつつ歩まれ、そしてそれを具体的に受け止められたお方であった。いや、私たちが経験する以上の苦しみを乗り越えられたお方であった。そうした「イエスの受肉」、「洗礼」、「荒野の誘惑」という事柄が、非常に短い言葉の中に凝縮された形で述べられています。

イエスが荒野において経験された誘惑は、私たちも全生涯を通し、長い期間にわたって味わうことになるかもしれませんが、四十日という凝縮された中で経験されたイエスは、私たちが出会うすべての誘惑に対処なさり、それを乗り越えられるお方であって、その誘惑が私たち自身にとってどんなに大変なものであり、揺さぶり動かすものであるか、私たちが巻き込んでしまうものであるかを充分にご承知なさっておられるお方なのだ、とここでは述べているのです。

また、「人間の弱さ」はもう一つ別な尺度からも捉えることができるのです。

「人間の弱さは、イエスの憐れみの対象になる弱さである」、そういう表現がこの中ではなされています。イエスはあらゆる点において、私たちと同様な試練に遭われ、そして、そのことによって、私たちに同情されうるお方であるということです。

大変平たい言葉で書いてありますが実は、「同情する」とは、注目するとか、それを支えるとか、担うということの意味している言葉です。ですから、イエスは「私たちの弱さ」に目をお留めになり、それを思いやり、憐れんでくださったお方でもあります。そして「それはどんなに優れた『人間の偉大祭司』であっても、その人の力ではその弱さから自由にできない弱さなのだ」ということを述べているのです。

この「弱さ」はそういう意味では「罪」という言葉で表現してもよいと考えられます。

「罪」という言葉も、当時の社会では色々な形で使われておりました。

例えば、「目に見える病、あるいは欠陥、あるいは社会的な病巣、そんなものを神が忌み嫌われるという意味を含んだ言葉として『罪』という言葉が当時は使われていました」

ですから、「あなたの罪は赦された」と言った場合、それは時には、その人が持っている病から解放されましたという宣言であつたりしたわけです。そういう意味では「私たちが神から造られた存在として、喜びと感謝を覚えて今日を生きることが困難な現実、それを全部ひっくるめて、『罪、ないしは、私たちのもっている弱さ』という言葉で捉えられてきたと考えてよいのではないかと思います」（現実には戦争、対立、組織内の葛藤と緊張、家庭内の諸問題、そして気候変動を含む各種のパンデミックにさらされている世界）

そうやってまいりますと、私たちは弱さの中で生き、弱さの中でうごめき、弱さの中で神を必死に求めていることが、今日の罪なる姿であると思うわけです。その私たちの罪に対して思いやることができ、それを乗り越えさせることができるお方であるというこの言葉は、もう少し別な言い方をすれば、「罪のないお方だけが、この罪を最も強列に感知できる、だからキリストはこの弱さをご自分の身にお引受けくださった」ということになると思うわけです。²⁷⁵

後の方で、⑦「その罪の中で、キリストは……激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力ある方に、祈りと願いをささげられました」ということが出て来ます。

（多くの注解者は、その部分について、これは「イエスのゲツセマネにおけるお祈り」を指していると捉えていますが、必ずしもそれに限定する必要はないだろうと思います。）

私たち一人一人の、そうした現実に対して「憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」という、この著者の呼びかけ

にお応えくださるお方、この「大祭司キリスト」というお方に、私たちは今から目を向け、心に向け、このお方に近づいていきましょう、という発信のもとにこの「大祭司キリスト論」が述べられているわけです。

そして、「近づこうではありませんか」という呼びかけは、大変興味深い呼びかけだなと私は思うのです。というのは、この「近づこう」というところに使われていますギリシャ語は、「七十訳の聖書」によりますと「祭司が礼拝のために聖所に向かって進んでいく時に使われている言葉」なのです。それは「距離を縮めることではないのです。自分自身が贖われ、整えられ、清められ、そして神御自身の愛の中で養われるために積極的に神の前に進み出ていく、そういう真の^{ヘリクダ}遜りの意味を持った言葉がこの『近づこう』ということなのです」。

つまり、「大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」は、ただ距離的に近くなることではなく、「恵みを受けるために、恵みに満たされた場所に自分の身を投げ入れようではありませんか」というように読み取ることもできる言葉であるわけです。²⁷⁶

結局、大祭司が神の前に進んでゆく時に使うための言葉を用いて、私たちに「恵みの座に近づこう」と呼びかけているこの著者の思いは、「キリスト者すべてが祭司のように聖所に近づくその佇まいをもって、神への礼拝を通して天なる聖所に近づくために神から召され、集められているということをしっかり捉え、保ち続けながら、現実の中を生きていこうではないか」という勧めになっていると思うのです。

⑮節では、

「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。」

と、「イエスの方が私たちに近づいてくださった」というように語る。

受肉(私たちと近づき人間と同化してくださったこと)、そのために、私たちがこの神に近づくことができるようになったことを、「大祭司イエス」という言葉を使いながら、この著者は私たちの心に何度も何度もこの後訴えかけてゆきます。

私たちは、初めから神に近づこうと思っても近づける者ではなく、キリストが近づいてくださることによって、神に近づけるようになったのだと言うのです。²⁷⁷

「キリストの神性」を前提として、その神性告白を堅持しながら、キリストが、更に人間の弱さに近づかれるという憐れみ深い祭司的行為にお立ちになる、「イエスの人性的ご行為」に対して、私たちはよく考えて見ようじゃないかと呼びかけているわけです。

「そのイエスの祭司的行為によって、初めてキリスト者が大胆に神に近づける。キリストが神に近づいてくださることなしには、私たちは神に近づけないのです。」

(ヤコブの夢が意味する信仰告白)

創世記の中で、ヤコブが兄から家督権を奪ったが、身の危険を感じて荒野にさまよう。そして、誰も自分を助ける者がいない、支える人がいないと考えて、淋しさの中で石を枕にして寝るのです。その時の彼の気持を、「ヤコブの夢」という形で聖書は私たちに伝えていきます。

あの箇所をよく読んで見ますと、「天からエスカレーターのように自動的に梯子が降りて来るのではないのです」。ヤコブが神と何とかして関わりを持ち続けたいと願い、地上から一所懸命梯子をかけます。(これが熟禱ということでしょうか)けれども、その梯子をヤコブは登れないのです。自力では、神に近づけないのです。ところが、その梯子を用いて、天の使いが降りて来てくれることによって、ヤコブと神とは接点を持てます。「下からではなく、上から働きかけてくださることによって、私たちの願いである神に近づくことが可能になる」と。創世記には既にそういう、『一つの神学的な主張、あるいは信仰告白』がきちんと示されているのです。²⁷⁸

私たちは何となく神が上から梯子を降ろしてくれ、それを登っていったのだという感覚に陥りがちですが、現実には「私たちが天に向かってかけた（霊的な祈りの）梯子を、神が用いて降りて来てくださる、近づいてくださる。従って私たちが神に近づこうとすることなしには、神は私たちに近づき給わない」。言い換えれば、「誰でも、彼でも構わないから皆、神は呼びかけているのだよ」と。

確かにそうですけれど、「その神の呼びかけに呼応するためには、そこに（私たちが）梯子をかけなければならない、それによって『近づかなければならない』という大事な一つのポイントがあること」をこの創世記の物語は私たちに伝えているのではないのでしょうか。

とすれば、今日のこの⑩節の御言葉、「大胆に恵みの座に『近づこう』ではありませんか」という呼びかけは、「このことなしには神と出会えないのです」という励ましであり、勧告である言っても良いと思います。

第5章①節⑥節

「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。

また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。また、この光栄ある任務をだれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、『あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ』と言われた方が、それをお与えになったのです。また、神は他の箇所でも『あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である』と言われています」

ここでは、「大祭司の条件について」書かれています。

先ず第①節は、

「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています」

これはレビの家系によるアロン系の大祭司の姿です。

それに続いて、直接に神に選ばれた個人としてのメルキゼデク系の大祭司（ここではイエス・キリスト）とアロン系の大祭司との比較がなされているわけですが、双方の大祭司は「先ず神から任命されなければならない」と述べています。

第②節、③節、

「大祭司は自分自身も弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやるることができるのです。またその弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません」

すなわちアロン系の大祭司についての弱さ、先程にもちょっと触れましたが、その弱さが強調されているわけです。

しかし、「この『大祭司の弱さ』とは旧約聖書を幾ら読んでも出て来ない、このことこそが、『ヘブライ人への手紙』が書かれた特色なのです」

「大祭司のもっている弱さ」の中の「弱さ」という言葉は、さっき申しましたように、「罪」という内容をもった言葉と置き換えることのできる言葉ですから、そういう意味では「大祭司であっても罪人なのだ、完全な存在ではないのだ、過ちがあるのだ」ということをここでは訴えているのです。

先ず、人間の大祭司がまとっている「弱さ」は具体的に、どんなものが根本的にあるのかというと、「まず無知な人や迷っている人を思いやれる存在である。思いやれるというのは同化できることである。そういう素地を自分の中に持った存在である」ということです。もしも同化できるものがなければ、思いやることもできないのです。

(アイデンティフィケーション)

これは私たちも色々な場面で経験します。例えば、高齢者の方々をお助けしようとする時に、自分は高齢に達していませんから、この方が一步あゆむ時に、どれだけ消耗をしながら一步を踏み出しているのかは、あまり伝わって来ないのです。自分がその年齢に達していないから分からない。あるいは、お腹が痛いと言われても、どのように痛いのか分からない、自分がその時、共通して経験するものを持っていない限り、相手の痛みは自分に伝わってこないわけですから、「無知な人や迷っている人を思いやることのできるのは、裏返して言えば、彼は無知であり、迷っていた存在だったのだ」ということになるわけです。ですから、「大祭司は弱さを担っていた存在なのだ」と第一に言っています。²⁸¹

そしてその次に、「だから、彼は自分の弱さ、自分の罪のために、贖いの供え物を献げる必要がある。これなしには彼は神に近づくことはできないのだ」と、③節で言っています。これはすごく重要な解釈だと思います。「大祭司が神に近づいて犠牲を献げるのは、罪を犯した人々の罪を赦していただくためだけではなく、自分の罪をもそこで贖われて、初めて神の前に出ることができ得る存在になるためなのだ。だから大祭司が神に近づく時に犠牲を献げることは不可欠な条件なのだ」と述べます。

これが実はキリストと比較してゆく上での大事なポイントになるのです。

「キリストは神に近づいていく時に犠牲を必要となさらないお方なのです。イエス・キリストは、私たちの偉大な大祭司になってくださった後には、犠牲を献げる必要は全くなかったのです」。これは、ご自分のための犠牲を必要とされないことであり、キリストは究極的な犠牲を十字架の上で献げられたのだから、もはや祭儀の中で犠牲は必要ないのです。

しかし、「キリストは私たちのために犠牲になってくださっていることを覚えなければならぬ。その記念のために私たちは『聖餐式を行っているのです』ということになるわけです」

「キリストは『弱さ』ではなく、『清さ』のために、彼の民を憐れみ、深く取り扱うことができる」ということを、ガスリンという人が『キリスト論』という書物の中で次のように述べています。²⁸²

「大祭司は弱さのゆえに弱さに共鳴できる。イエスは、ご自分が清いお方であるがゆえに、その執り成しが、弱いものを根こそぎご自分の中に包み込むお方であり、そのことのゆえに、私たちを憐れみ、豊かな恵みをもってお取り扱いになり、高めてくださるお方なのだ」

だから、イエスが偉大な大祭司であられることは、この上ない幸せなのだ、ということをお大変力強く述べています。

「イエスは御自身のためには犠牲は要らないのですから、御自分を犠牲として献げたのは、御自分のためではないと言えるわけで、これにより、十字架の上の贖いにおける『完全性』を語ろうとしているわけです」。が、その意味で、「イエスが偉大な大祭司であられるという意味と、旧約聖書において様々に書いている大祭司についての事柄との相違点が、どこにあるのかに目を向けてゆきましょう」というのが、5章の冒頭のところで私たちに語られている言葉だと思えます。

③節では、

「また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません」

と「アロン系の大祭司」について書いています。つまり、自分の罪のために犠牲を献げなければならないのは、その大祭司は不完全な存在だということになるわけです。

イエスについては、自分のために犠牲を献げる必要はなかったことを、その後で述べることによって、イエスが真の偉大な大祭司であることの意味を強調しようとしているのです。

「神と人間との中間にあって、人を神に取り次ぐ大祭司の役割、それは厳密な意味では、『人間から選ばれた大祭司には完全には執り成しを行いません』。だから『神は御独り子を大祭司として私たちの中に送り込んでくださり、私たちの罪を完全に贖うことができるように導いてくださった』のです」と言っているのです。

④節、

「また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです」

と述べます。

この祭司職は光栄ある任務で、明確な神の召しによって成り立っているのだと述べているのです。

この一つの部分を軸にしてヘブライ人への手紙の著者は、更に「大祭司キリスト」という方を紹介し、キリストの祭司職というものを述べていくわけです。

第⑤節で

「同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、『あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ』と言われた方が、それをお与えになったのです」

と言っているのです。ここで、詩篇の2篇⑦節を引用して、イエスが神の子として私たちの中においでくださり、大祭司として神の任命をお受けになったことを表明しています。

284

この詩篇の2篇⑦節の言葉は、実は初代教会が旧約聖書を用いてキリストを証した、『キリスト証言句集テストモニア』という書物からの言葉で、その中で最も重要なものの一つであったのです。このテストモニアを用いてこれを語ろうとしているのは、一つは「キリストが神の子、わたしの子である」という神の御子、即ち神聖なるお方で、イエスは神性を完全にお持ちになっていらっしゃる御神の子なのだ、ということと述べるのと同時に「今日、わたしはあなたを産んだ」というこの言葉で、キリストの公生涯の開始の際、あの「バプテスマの時に、天から御声があった」ことを思い起こさせようとしています。

そして、イエスは私たちと同じようにバプテスマを受けられて、人と同じお姿をとられ、人間と同一の歩みをなされました。つまり、地上において、私たちとひとつとならんとされる歩みをなされたのです。

更に、そのキリストの全生涯は、大祭司として祭司的行為のために遣わされて来たのだということと語っていきこうとしています。そういう意味で詩篇の2篇⑦節のフレーズはヘブライ人への手紙の中では何度か出て来るのです。

私は、初代教会が「キリストの証言句集」をもっているという、その意味は深いものがあるのだなと感じるのです。

第⑥節では、

「また、神は他の箇所で、『あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である』と言われてます」

と述べていますが、これは詩篇の110篇の④節の言葉で、やはり「キリスト証言句集」の中にも記されているのです。

この書簡作成りの中で、何度も何度も繰り返されている一つの主題は「イエス・キリストこそ神の御独り子であり、神性を持ったお方であると同時に、私たちの側に立って神に近づき、神と私たちとを近づけてくださるお方なのです。完全な仲保者なのです。その意味において彼は完全な大祭司なのです。」ということと語ろうとしているわけです。

イエスのみが完全な大祭司ですということを、ここで断言しているわけです。ですからイエスの後には、もはや次の大祭司は必要ない、新たに任命される必要はない。それまでは大祭司は代々任命されて来たわけですが、イエス・キリストによってその職務は完成されたので、もはやそれから後は大祭司は必要なくなったという捉え方をしているのです。

人間から選ばれた大祭司の条件をすべて満たし、更に、その事柄を遥かに凌駕しているイエスに対して、次の部分から説明が移っていきます。

⑦節

「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流ししながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その恐れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」

⑦節からは後は、完全な大祭司キリストを紹介する説明文に変わっていきます。

「人間の弱さへの思いやり」について考えてみると、

「人間の祭司は、自分自身を越えた憐れみということから執り行うのではなく、自分自身の身に負ってきた痛みを共有しているゆえに、理解し、これを執り成していける本来の弱さ、即ち『罪』というものの必然性の中から人々の執り成しをした」。だが、「イエスはそうではなかった」。

「イエスは、人の罪を、ご自分が具体的に人となられることによって100%経験なされた。だから、この短いヘブライ人への手紙の初めの部分で、彼はイエスが公生涯にお入りになられたあの段階から、十字架におかかりになられるまでの、すべての人生(およそ三年間と考えられています)その中で経験なされたすべての事柄を、私たちの弱さを経験なさせるために、あえてご自分の身をお晒しになったのだ」と捉えるわけです。

そういうことがなかったら、イエスは私たちを完全に執り成す大祭司にはなれなかったもので、イエスは私たちを執り成してくださるために、ご自分がそのすべての苦悩を舐められたのです。「だから裏切られることも、捨てられることも、逆られることも、イエスの御生涯では必要だったのだ」という捉え方をさえしています。

しかもイエスは、「キリストとして」神からこの地上に降るように任命されました。御独り子がこの世に遣わされたという中での任命であり、派遣された存在で、アロン系の大祭司のように神から任命されたお方であるので、まぎれもない大祭司なのだと言っているのです。

随分こだわりながら大祭司であられる次第を述べているのは、勿論この手紙を受け取る相手がユダヤ人だからなのです。私たちはこの著者が何でこんなに必死になってこだわっているのだらうと思いますが、「ユダヤ人にとっては、大祭司は侵すことのできない存在なのです。ですから、そういうお方であるとイエスを大祭司として高く挙げるためには、彼らが納得できるように何度も何度も繰り返し語りかける必要があった」ということだらうと思います。287

第5章⑦節から⑩節、（完全な大祭司キリスト）

「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その恐れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです」

この部分をまとめて記してみましたが、ここでは、「完全な大祭司キリスト」がどのようなお方であったのかを述べています。

⑦節では

「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のあるお方に、祈りと願いとをささげ、その恐れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」

と、ここでは随分生々しく、イエスの色々な極面について述べています。

「イエスが肉において生きておられた時、『肉の日々』という言葉が使われているのですが、この表現はキリストが地上におられる間、身に負われた人間の弱さの体験を殊更強調しています。そして受肉の状態から、神の右に上げられる昇天まで、イエスの地上における生活という形で捉えた日々を『地上におられた時』という言葉で表現していると考えてよいと思います」

でも、「イエスは昇天なさって終わってしまったのではない」ということも、この言葉の裏側にはあるわけです。イエスの支配は今なお続いています、ただ地上にいらした時はこうであっても、地上におられない時もあるのですよと述べているわけで「天に在って今再臨を待っていらっしゃるキリストが、ちゃんとこの裏側には述べられているわけです」。

私たちはイエス・キリストというお方を見る時、「いつでも一緒に人間たちの中においてくださったイエスに対しては」非常に感謝をしたり、喜んだり、感動したりして、その方を想っているのですが、「昇天なさってから後もお、地上の人間たちを顧みくださるイエスというお方に対して」は、時には忘却の彼方、無視、無関係、無関心に押しやっけてしまいます。

もっと別な言い方をすれば、再び来て裁かれるお方であることを忘れてしまい、何か十字架の贖いですべては万歳なのだという感覚になってしまっている。そういう部分が非常に強いわけですが、そういうことに対する一つの警告として「肉において地上に生きておられた時」という限定した言い方で語られているわけです。

イエスのご生涯というのが、「肉において生きておられた時」また、「その前……先在性があるわけですから……の時」また、「天に帰られた後の時」というのがあって、その一部分が、イエスが大祭司になられるために、人間たちの中で様々な苦しみを経験なされたのだ、と述べているわけです。²⁸⁹

「そのイエスが激しい叫び声をあげられた……この、『激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に祈りと願いとをささげ』というこの箇所（こういうイエスの御姿の生々しい描写は聖書全体でここにしかないのです）が、言い換えれば、イエスが本当に弱くなられた御姿、人間の罪の中にどっぷり身をおかれた御姿、そのとき私たち人間と「同一になられた」御姿というのを、つぶさに表現しています。

言い換えれば、「激しい叫び声をあげられたイエス、それは、全く罪を冒されなかった御方が、御自分の中に全人類の罪を引き受けられたことを認めたとき、もはや、どうすることもできなくなって、叫び声をあげざるを得なかった」ということであり、強烈な神の断罪に対するイエスの抵抗感というものを、この「激しい叫び」という言葉の中で表現していると考えるとよいのではないかと思います。

また、「激しい叫びをあげた」ということは、即ち、イエスが御身を挺して罪人を執り成してくださっている熱い祈禱を示し、イエスが私たち罪人一人一人に対して「祭司的な行為」をなされている御姿を表現していると捉えることも出来ると思います。

しかし、そうした祭司的見地からのみ、「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」の叫びを捉えますと、御子キリストの叫び声は、人から受けられた苦しみゆえでなく、また、神から受けられた計り知れない苦しみゆえでもなく、それは、仲保者としての御自身立ち位置を明らかにされた上で、贖いの御自身を献ぐ祭司的な行為を人々に知らしめるために叫ばれたのだと受け取られ、今日の教会の多くもそのように語り伝えているのです。

そのような考えにおいては「イエスの負われた全人類の罪の痛みや、その赦し難い罪に対する神の激高、あるいは、それらを受け止める激しいいたずき（労苦）ということから発せられたイエスの叫び」という面を捉えようとせず、そういうことに対して私たち側が当然抱くべき負い目や罪責感をすり抜けて、「人類の罪の贖い」という大義名分のひと言で、イエスの十字架の偉業を片付けてしまう、そんな姿勢が生ずるのではないのでしょうか。²⁹⁰

しかし、この手紙の著者は「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」の叫びを、イエスが御自分の存在を揺るがす問題として相対され、もう放棄不可能な絶体絶命の状態の中で、大声で叫ばれたものと捉えており、しかもそれは、神と人間の裂け目に立たれたイエスだけがあげられる叫びなのだ、という捉え方をしているのです。

そしてこのことは、ゲツセマネの園でのイエスの祈りが、壮絶な神との戦いの祈りであったことも示しています。それゆえ「血の汗を滴らせて」というあの表現も、もっと人間的な次元での「涙を流しながら」という言葉によって表現しているのです。

「イエスは涙を流された」、この本当に耐えかねた状態の中で、人の子イエスは声をあげられたという側面からも、イエスをしっかり捉えてほしいという熱望がこの手紙の著者にはあるのです。(⑦節は作者の力が及ばず、森容子先生に特段の推敲をお願いしました)

パスカルの書いた「パンセ」の553番というところに「イエスの秘儀」という箇所があります。その中から幾つかの部分を取り出してご紹介しておこうと思います。

「イエスは、その受難においては、人々が彼に与える苦しみを忍びたもう、だがその最後の苦悩においては、我とわが身に与えられる苦しみを忍びたもう」

これはイエスが十字架上で多くの人々が担うべき罪のためにお苦しみになったけれどそれはご自分がこの世に身を置かれた時に、御自分の身の痛みとして負われたのだ、他人事としてではないのです。綺麗事としてではなく、本当に引き裂かれる肉体のいたずきを覚えながらイエスはその痛みを心底経験なさったのだ、ということ述べているのです。

291

「それは、人間の手から来る苦痛ではなく、全能の御手から来る苦痛である。何故ならそれに処するには(イエスは)全能であらねばならないからである」

神が全能であられるように、キリストもまた全能でなければ、人間の罪を贖い、完全に取り去ることはできない。だからイエスが苦しまれた苦しみは、人間がイエスを十字架にはりつけにしたという肉体的な苦痛ではなく、神からのイエスの全能に対するチャレンジで、御子イエスの全能を否定*し贖いを虚しくしようとする全能の神からの絶大なる抵抗力に対して、イエスは全能であるがゆえに苦しまれたのだと述べているのです。

(アンダーライン*「これは、罪なる人類を審かすにおかれぬ神と、その人類を贖い救わずにおかれぬ御子イエスとの『全能対全能の壮絶なる戦い』を示しています。この戦いのイエスの勝利宣言こそが『なし遂げられた』であったと思います」森容子先生からの推敲です)

「イエスは、人間からの同情を、慰めを、求めたもう。そのようなことは、思うに、彼の全生涯の中でただ一度であった。だが、彼はそれを得ることができない、弟子たちは眠っているからである」

ゲツセマネの園の状態です。イエスが「わたしのために祈ってください」と言われたのはこの時だけなのです。イエスがたった一度「わたしのために祈ってくれ」と言ったその訴えさえも弟子たちには聞き届けてはもらえなかった。

最後の決定的な裂け目というのは、こんな形でパスカルの目には映っていたのだらうと思います。

「イエスは、その弟子たちの眠っている間に、彼らの救いをもたらされた」

私はこの箇所を読みながら、「わたしのために祈ってくれ」と言われているのに、それを裏切っている弟子たち、それに応えられない弟子たちがいる。その応えられない実態の中にいるのに「裏切った人々をも赦して、それを深い情けと憐れみとで包んでいるすごいイエスの姿」に、思いを馳せるのです。292

「あなたがたは肉体がそんなに疲れているのか」と理解されて、それをそのまま受け入れて赦してくださる。御自分自身の足下が崩れ去る危険の中で、せめて、そうした危険の中

にあることを理解して祈ってくれと願いながら、それが聞き届けられなかった弟子たちに対して恨み事を言うのではなく、なおも彼らを赦す愛で包み込んでいくというイエスのお姿が、カルバリの丘の十字架の上で、もう一度、私たちに鮮明な形で、「父よ、彼らをお赦してください」と表明されたのではないかと思うのです。

「イエスは、その友がみな眠りこけ、その敵がみな目を覚ましているのを見、その身を全く父に委ねたもうた」

イエスの頼りになるはずの仲間が全部眠ってしまっていて、イエスを疎外しようとする者だけが目覚めていて、イエスに対して挑戦し続けている。その中でイエスは御自分の身を神の御手に完全に委ねられた。それは、地上においては、もはや敵のなすままに任せられたという形をとりますが、しかしながら、神こそがそれをお赦しになられたのだとすれば、イエスはそれを喜んでお受けになったのです。

ここに「どうかわたしからこの苦い杯を取り除いてください、しかしわたしの思いではなくあなたのみこころをなさってください」という、「神への全き信頼が出て来るわけ」です。

私は、そういう意味で「イエスの大祭司性が、『神への決定的な従順』ということに裏打ちされているのだ」と見ています。

イエスは、

- ①「神が召してくださったその召しに対して忠実であり続けられました」。
- ②「神に対してどんな状況の中にでも絶対に服従なされた。あるいは神に依存され続けられた」。そして、
- ③「神を決定的に畏れ敬い続けられた」。
- ④「自分の身を献げつくして神の言葉に従順であられた」。

「この四つのポイントを、イエスはきちんとご生涯の中でクリアなされた、そのことが『メルキゼデクに匹敵する大祭司なのだ』と、このヘブライ人への手紙の中で述べている根幹的な理由なのではないか」と思うのです。

「死から救う力のある方に対する、イエスの祭司的な祈り、またそれに対する苦闘というものが相まって、『イエスが死人の中からよみがえられたという形』で、神に完全に聴き入れられた」。

つまり、自分が生きて神の御力を示すのではなく、自分の身を献げ切って神の御力を具体的に人々の前に明確にするという、生き方が実は大切なのです、それゆえ、正に迫害の中に置かれようとしているヘブライの人々に向かって、パウロが「命を永らえることが救いなのではなく、あなたの命が損なわれたとしても、そのことを通して神の力が具体的に歴史の中に働くことこそが、あなたがたが召され、神の民であるということの光栄ある務めなのだ」と伝えているわけです。ここではある意味で「殉教を覚悟した形での信仰告白」が求められていると言ってよいと思います。

今、私たちが包んでいる歴史は、生ける神、主なる神を受け入れない歴史です。

ですから、そこで、私たちが神を神として受け入れることには、当然「殉教」を覚悟してなさなければならない信仰の告白があると言えます。「殉教」即ち、自我に死して、⑦節の「神を畏れ敬う」、これはやはり非常に大事な部分だと思うのです。²⁹⁴

(私は何度か松山幸生先生から、殉教の覚悟が必要な時代が来る、その時に信仰が問われるとお聞きしました。先生は覚悟を持って国会の前で祈られました。)

第⑧節から⑩節、

「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、ご自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです」

ここの⑨節で述べられている「完全であった」とは、別な言い方をすれば、「私たちのすべてのいたずきを完全に乗り超えられた、あらゆる罪を完全にその足下に踏みすえられた、そして、罪の實の究極である死をもイエスは打ち破られた、そのことを全部まとめて「イエスが完全な大祭司である」という言い方をしている言ってよいと思います。

イエスは神として人間に近づき、その弱さをあえて身にまとい、全き人となられた。それはとりもなおさず、御子が全き人として神に近づく道を全うされたことである。その歩まれた模範が神を敬う生き方、神の言葉に徹頭徹尾聴き従ってゆく生き方であった。このことを通して、今度は、私たちが、このキリストに聴き従う者にならなければならないと思います。

「神を畏れ敬う」ことは、ただ単に私たちがそういう気持で生きることではなく、神が私たちに求めたもうことを「100%の達成」を掲げて、それが成し遂げられるように祈りつつ、『自分自身を神の前に差し出し続けて生きてゆく』ことではないかと思うわけです。その時初めて、私たちはこの世のために執り成すことのできる者、言い換えれば、神から召された祭司としての役割を担える者、この歴史に対して証しできる者、になっていけるのではないのでしょうか。

「キリストは私たちの模範として大祭司となってくださった。だから私たちは、このお方を慕い、このお方に導かれ、『この世に執り成しをもたらす祭司』として生きて行こうではないか」という呼びかけが、この後に続いていくわけです。

それは、「あなたがたの命をうかがう者のためにも、自分の命をキリストに差し出して従っていこうではないか。そうして彼から離れ逃れるのでなく、彼のためにこそキリストと共に祈っていこうではないか、という呼びかけが生まれて来る、大きなうねりを作っているのだ、と言ってよいと思います」。

今日はそういう意味で、序論的な部分ですから、余り細かいところにまで詳しく入ってしまわずこの辺で話をおしまいにしたいと思います。(1996年9月14日)

写者あとがき

今私は、くすしきみ恵みの只中にあります。この9回目は2022年4月17日のイースターに掲載することになりました。受難と復活の時、今までにない心の深さで過ごしております。教会が遠いことを理由に礼拝に熱心ではありませんでした。「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を写書させていただくことを通して、鈍く、且つ我儘な私の心もやっと呼び覚まされました。言葉では礼拝の大切さを語りながら、行動は反対を向いておりましたこと深く懺悔します。無知の罪を深く自覚しております。

神は罪を憎み裁かれる、断罪されることを私は忘れていました。この基礎的な認識を捨象してしまっていたのです、長い間。学生時代に神学生の方に質問したことすら忘れていました。神を恐れ敬うことなしに救いを賜ることはできない。しかし、救いは約束されていた。旧約聖書の預言から受難・復活の秘儀に至るまで通奏低音のように響いていたのが神の義であると。しかし私はそれをしかと確信する信仰を持ちえなかった。

神はどこまでも愛を注いでくださり、時を得て「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を与えてくださった。時は必然であるかも知れないが、無知の自覚は深く、後悔もあり、受難と復活に関する説教への飢餓があり、体力の限りを尽くして読書に没頭しているところです。何という恵みでしょう！「こころははやっても、肉体を弱い」しかし「立て、行こう。大胆に恵みの座に近づこう」。かつて、教会が恋しい若い時の、あの求める心が蘇った感じを抱えています。明日の礼拝が待ち遠しい、何十年ぶりの覚醒です。

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の一語一語に新しい学びがありますが、現役時代に最も苦勞したコミュニケーションとの関連で松山幸生先生が教えてくださった「アイデンティフィケーション」との言葉はまだ他の本には見出せませんが、徹底して「相手の立場に身を置いて歩まれ語られたイエス」（本文p106）との説明に加えて「インカーネーション」受肉、低くする、くだる、降下する「自分の高さをかなぐり捨てて、より低いものに添えるように自分の身を沈めていくこと」、それを神がなさってください故に栄光が輝いた。復活信仰の基が据えられた。そのような理解をしています。私にとっては身近な問いでありましたので、親しみのある言葉で説明していただき納得感が深まりました。

「人は一生の間のどこかで必ず聖書を手にする」と言われていますが、聖書は手にし易いですが、難解です。とても独りでは読み進めません。それは、今、この恵みの作業をしながら実感しているところです。句読点ひとつ、一行の行間の深さと広さ、時間と空間の移り変わりの激しさは痛く私に感じられます。

幸いにして、森容子先生の丁寧なお導きを賜り、正しく写書することができております。感謝でございます。罪深き者です。この歳になってと思わないわけではありませんが、この歳になってやっと辿り着いた、そして、まだ僅かに残る力を振り絞り「夕暮れに光あり」を証ししてゆきたいと祈っております。

2022年3月19日（土曜日）最終完成4月18日となりました。